

原 著

## 中学生における両親サポートとストレスに関する研究(Ⅰ) —親サポート尺度・ストレス尺度の作成—

服部隆志\*<sup>1</sup> 島田 修\*<sup>2</sup>

### 要 約

本研究は、一般家庭における両親の援助行動及びストレスの基礎的研究と位置付け、発達心理学の知見を取り入れた独自の「親サポート尺度」、及び、学校ストレスに限定しない、親子関係や自己などを含めた「ストレス尺度」の作成を目的とした。同時に、両親サポート、ストレスの量的特徴を調査することも目的とした。

尺度項目は母親からの自由記述や先行研究を参考に収集した。そして、ワーディングの修正と調査Ⅰ(中学生162人を対象)を経て、調査Ⅱにおいて中学生286人を対象に因子分析を行った。その結果、「親サポート尺度」は、情緒的サポート、手段的サポート、受容的サポートの3因子構造、「ストレス尺度」は、友達関係ストレス、親子関係ストレス、自己ストレス、勉強ストレスの4因子構造であることが明らかにされた。また、両親サポート、及びストレスについて量的検討を行ったところ、1)両親サポートについて女子>男子という性差が、2)サポート量については母親が父親より多く知覚されていることが、3)因子別の平均得点では情緒的サポートと勉強ストレスがそれぞれの尺度で平均得点が最も高いことが認められた。最後に、今後の展望についての考察を行った。

### 序 論

近年、中学生における、不登校、いじめ、校内暴力などが教育現場だけではなく、社会的にも取りざたされている。文部科学省統計<sup>1)</sup>によれば、中学生の不登校者は平成13年度には11万人以上にのぼっている。これは、中学生の36人に1人が不登校であることを表している。一方、小学生の不登校者は275人に1人であり、中学生の方が約7倍多いということになる。このことから中学生のメンタルヘルスがいかに重要であるかが伺える。また、厚生労働省の「健やか親子21」では主要課題のトップに「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」が掲げられ<sup>2,3)</sup>、思春期の問題についてようやく国レベルで取り組みが行われようとしている。国レベルの取り組みとして、文部科学省は、平成17年度を目指して、全国の公立小・中学校にスクールカウンセラーの配置を進めている。スクールカウンセラーは中学生の心理的適応を考える上でとても重要な役割を担う。一方で家族も、子どもにとっては多くの時間を過ごす日常生活の基盤であり、子どもの発達・成長には欠かせない重要な役割を担うものである。加えて、中

生の問題行動の背景には心理的ストレスが存在するという研究が多数報告されている<sup>4-6)</sup> ために、心理的ストレスの影響についての研究も同時に求められている。そこで本研究は、問題とされる時期の中学生と、それを取り囲む両親サポートとストレスについて焦点を当てることにする。

中学生は、思春期、または青年期前期と呼ばれる時期である。この時期の親子関係の特徴として、自立と依存との葛藤の時期であることがあげられる<sup>7,8)</sup>。つまり、中学生の時期は、今までは親に依存して頼ってきたが、これからは自立したいという願望がある一方で、どうしても頼らなければならない面もあるという葛藤が子どもの中に生じる時期である。また、思春期臨床事例において、父親の養育態度については放任である事例が、母親の養育態度については過保護、溺愛、過干渉である事例が多いという報告<sup>9)</sup> や、過干渉や放任が子どもの精神的・身体的健康に影響を及ぼすという報告<sup>10)</sup> がされている。これらのこともあわせて考えると、中学生の子どもを持つ親は、あらゆるサポートを行うのではなく、子どもが自立できるように、適度な距離を置きつつ、適切なサポートを送るということが求められるのではないだろう

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻 \*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科  
(連絡先)服部隆志 〒701-0193 岡山県倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

か、そのためにも適切なサポートとはどんなサポートなのかということをはっきりさせる必要がある。

ストレス研究の中には、「ソーシャルサポートは、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たす」<sup>11)</sup>という仮定のもと、ストレス緩衝要因としてソーシャルサポートに注目した研究が多く行われている。ソーシャルサポートの定義については研究者により様々であるが、周・深田<sup>12)</sup>はいくつかの先行研究の定義をふまえた上で「個人が感じたり、受け取ったりする、あるいはその個人を取り巻く様々な人が意図したり、実行したりする、支援的な働き」<sup>13)</sup>と定義しており、本研究もこれにならう。さらに本研究では、この中に、行わないサポート、つまり、見守るといった干渉しないことによるサポートも、サポートの1つの形として含めることにする。

Barrera<sup>13)</sup>によるとソーシャルサポートは、①社会的包絡 (social embeddedness)、②知覚されたサポート (perceived support)、③実行サポート (enacted support) の3つの次元に分類されるという。岡安・嶋田・坂野<sup>14)</sup>や嶋田<sup>15)</sup>は、3つの次元のなかでも、②知覚されたサポート、つまり、「他者からの援助を受ける可能性に対する認知的評価」<sup>13)</sup>という次元からサポートを測定することが妥当であるとしている。

ソーシャルサポートの測定については、サポートのカテゴリーについて、理論的分類と統計的分類が一致しないことが多く、これが問題としてよく取り上げられている<sup>16,17)</sup>。わが国における、小学生から高校生までの親からのサポートを測定する尺度は複数あるが、抽出された因子数は尺度により違った結果が得られている。要約すれば、1因子構造であるもの<sup>14,15,18-21)</sup>、2因子構造であるもの<sup>22,23)</sup>、4因子構造であるもの<sup>24,25)</sup>など様々である。表1は、それらをまとめたものである。このような因子構造の違いは、①研究者がよって立つ理論的分類の違い、②因子分析において何因子抽出するかの決定基準の違い、③被調査者の発達段階による違いなど

様々な理由が考えられる。また、福岡<sup>26)</sup>はクラスター分析を用いて、類似度からサポートを「助言・相談」、「慰め・励まし」、「物質的・金銭的援助」、「行動的援助」の4つに分類し、さらにサポートは、前者2つをあわせた「情緒的サポート」、後者2つをあわせた「手段的サポート」から構成されるとしている。本論では詳しく取り上げなかったが、海外におけるサポート分類については、Barrera&Ainlay<sup>27)</sup>、Cohen&Wills<sup>28)</sup>、Lin<sup>29)</sup>、Vaux<sup>30)</sup>などに詳しい。

本研究は中学生の時期に焦点を当てるが、中学生におけるソーシャルサポートの量的な特徴として一般的には、母親>父親<sup>14,20,31)</sup>、女子>男子<sup>14,20,22,31)</sup>、1年生>2年生<sup>14)</sup>という結果が概ね得られている。しかし、父親サポートについて、得点の低さだけでその重要性の効果を軽視することはできないと指摘されるように<sup>16)</sup>、サポート量が多いか少ないかで単純に影響について結論づけることはできない。

本研究はソーシャルサポートの中でも、両親というサポート源に焦点を当てることにする。両親サポートに限定した理由は、1つ目に、臨床的にも不登校やその他の問題行動の背景として、家族(両親)の重要性が指摘されている<sup>32,33)</sup>からであり、2つ目に、岡安<sup>14)</sup>、嶋田<sup>31)</sup>より、中学生においては、親サポートが友人サポートよりも有効であることが確認されているからである。子どもにとって最も重要なサポート源は、基本的には両親に他ならないであろう。

先に述べたように、中学生において、日常感じるさまざまな心理的ストレスと、不登校、校内暴力、いじめなどの問題行動との関連は見逃すことのできない問題である。例えば、児童生徒課<sup>34)</sup>によると、中学生において不登校状態となった直接のきっかけで、1番多いのが「病気以外の本人にかかわる問題(28.4%)」、2番目が「友人関係をめぐる問題(21.9%)」、3番目が「学業の不振(8.9%)」、4番目が「親子関係をめぐる問題(8.0%)」であった。これらがストレスサーとなって不登校に陥ったとも考えら

表1 わが国における小学生～高校生の親からのサポートを測定する尺度

研究者	因子数	因子	調査対象者	項目数
森ら <sup>19)</sup>	1		小学生	11項目
嶋田 <sup>15)</sup>	1		小学生	16項目
嶋田ら <sup>21)</sup>	1		小学生	5項目
廣岡ら <sup>22)</sup>	2	情緒的・道具的	中学生	13項目
蒲田ら <sup>24)</sup>	4	情緒的・情動的・道具的・娯楽関連的	中学生	27項目
三浦ら <sup>18)</sup>	1		中学生	5項目
西野ら <sup>20)</sup>	1		中学生	8項目
岡安ら <sup>14)</sup>	1		中学生	16項目
渡辺ら <sup>25)</sup>	4	情緒的・娯楽関連的・プライベート・道具的	中学生	27項目
嶋 <sup>23)</sup>	2	心理的・物理的	高校生	12項目

れる。わが国におけるストレス研究は大きく、Holmes&Rahe<sup>35)</sup>のような人生の中の重大ストレスであるライフイベントに関する研究<sup>36,37)</sup>と、日常生活において日々感じるようなデイリーイベントに関する研究に分類することができる。さらに、中学生などの学生においては、日常生活で日々感じるストレスの中でも、特に学校場面に注目した研究と、学校場面に限定しない生活全般に関連するストレスを測定しようとする研究に分けることができる。わが国における、小学生から高校生までのストレスを測定する尺度は、学校ストレスを測定するもの<sup>14,38-44)</sup>と、生活ストレスを測定するもの<sup>45-48)</sup>とに大別される。表2は、それらをまとめたものである。研究数から言えば学校ストレスとして、学校場面のみのストレスを測定する研究が比較的多く行われているが、中学生にとってストレスは、学校場面でのみ感じるのではないために、家族などを含めた日常生活全般にわたるストレスを検討する必要があるだろう。しかし、中学生を対象にした生活ストレス尺度は今だに数が少ない。

本研究は中学生の時期に焦点を当てるが、中学生におけるストレスの量的な特徴として、一般に女子が男子よりストレスを多く感じる傾向があり<sup>14,22,42,48)</sup>、学年では、1年生<2年生<sup>14,22,42)</sup>という傾向が認められるが、ストレスの種類により性差や学年差の現われ方は異なる。また、因子別では、ストレスの中でも「学業」に関するストレスの経験率が他より顕著に高いことが示されている<sup>42)</sup>。

### 目 的

中学生の子どもを持つ両親は、子どもにどのようなサポートをすれば良いのか、また、ストレスは精神的健康へどのような影響を及ぼすのかについては、臨床の場に限らず、一般家庭や学校の場にお

いても大きな関心ごとの1つである。そこで本研究は、一般家庭における両親の援助行動及びストレスの基礎的研究と位置付け、問題とされる時期の中学生と、それを取り囲む両親サポートとストレスに焦点を当てる。

本研究の第1の目的は、「親サポート尺度」、「ストレス尺度」を作成することである。従来のサポート研究では、親からのサポートを測定する尺度はソーシャルサポート尺度を用いて友人や教師などと一緒に測定されてきた。しかし、親サポートのみを測定することが目的であれば、これまでに使用されているソーシャルサポート尺度ではなく、親サポートに限定した独自の測定尺度が必要である。また、今回の尺度では、中学生は、第2次反抗期、自立と依存の葛藤の時期であるという発達心理学の知見を考慮する。つまり、この時期のサポートは、いわゆる行うサポートだけでなく、行わないが愛情などの気持ちを込めて見守ることも大切ではないかと考える。よって、従来のサポート尺度では測定されなかったこれらの内容も含めた、幅広い様々なサポートカテゴリーからなる「親サポート尺度」の作成を行うことを目的とした。「ストレス尺度」については、子どもが感じるストレスは学校においてのみではないために、従来の学校場面に限定した学校ストレス尺度ではなく、中学生が日常的に経験し、嫌悪的であると思われる生活ストレス尺度の作成が必要である。つまり、臨床的にも重要視されている家族や、従来の研究ではあまり検討されてこなかった自己などを含めた尺度の作成を目的とした。

また、中学生における両親サポートやストレスの量的な特徴について明らかにすることを本研究の第2の目的とする。現代の中学生の姿を示してくれるような資料が得られることを期待したい。

表2 わが国における小学生～高校生のストレスを測定する尺度

研究者	生活or学校	因子数	因子	調査対象者	項目数
堂野ら <sup>45)</sup>	学校	3	学習場面・友人関係・社会的承認	小学生	24項目
	生活	2	家族関係・生活習慣・遊び		9項目
古市ら <sup>38)</sup>	学校	3	友人関係・教師関係・学習関係	小学生	23項目
長根 <sup>41)</sup>	学校	4	友達との関係・授業中の発表・学業成績・失敗	小学生	20項目
嶋田ら <sup>43)</sup>	学校	5 (男子)	対人関係・学校システム・発表場面・学業達成・行動規則	小学生	28項目
		4 (女子)	対人関係・学校システム・学業達成・サポート人物		
菊島 <sup>46)</sup>	生活	5	親・友人・集団生活及び日常生活・教師・学業	大学→中学	40項目
岡安ら <sup>42)</sup>	学校	6	教師との関係・友人関係・部活動・学業・規則・委員活動	中学生	37項目
岡安ら <sup>14)</sup>	学校	4	友人関係・先生との関係・学業・部活動	中学生	32項目
高倉ら <sup>48)</sup>	生活	5	部活動・学業・教師との関係・家族・友人関係	中・高校生	25項目
管ら <sup>39)</sup>	学校	5	学業と進路・校則と規則・教師との関係・友人との関係・部活動	高校生	25項目
嶋田ら <sup>44)</sup>	学校	5	学業・教師との関係・注意・友人関係・進路	高校生	30項目
森下ら <sup>40)</sup>	学校	4	勉強(成績)・先生との関係・授業・失敗	小～高校生	22項目
中村ら <sup>47)</sup>	生活	3	日常のささいな混乱・自分自身に対する悩み・ストレスのある生活事件	小～高校生	27項目

## 項目収集

## 1. 親サポート尺度及びストレス尺度の項目収集

## 1.1 目的

項目収集では、今まであまり検討されてこなかった側面を含めた親サポート尺度、ストレス尺度を作成するために項目を収集することを目的とした。

## 1.2 方法と結果

## 1.2.1 調査対象者

項目収集は、公民館の講座「思春期を考える」に参加している、実際に小・中学生の子どもを持つ母親を対象に行われた。

## 1.2.2 手続き

## (1) 親サポート尺度

親サポート尺度は、まず、福岡<sup>26)</sup>を参考に「助言・相談」、「慰め・励まし」、「物質的・金銭的援助」、「行動的援助」の4つのサポートカテゴリーを設定した。さらに、調査対象者が中学生であることを考慮し、「肯定的情緒」と、「見守る」という2つのサポートカテゴリーを加え、合計6つのサポートカテゴリーを設定し、これらに当てはまる内容を講座の参加者に自由記述してもらい項目を収集した。加えて、森ら<sup>19)</sup>、落合・佐藤<sup>49)</sup>、岡安ら<sup>14)</sup>を参考に、最終的に各サポートカテゴリーそれぞれ6項目からなる、合計36項目の親サポート尺度を作成した。

## (2) ストレス尺度

ストレス尺度は、先行研究を参考に、「勉強」、「親子関係」、「友達関係」、「自己」という4つのカテゴリーを設定し、これに当てはまる中学生が日常生活でよく感じるであろうと考えられるストレス内容を、講座の参加者に自由記述してもらい項目を収集した。さらに、菊島<sup>46)</sup>、岡安ら<sup>42)</sup>、神藤<sup>50)</sup>、高倉ら<sup>48)</sup>を参考に、最終的に各カテゴリーそれぞれ5項目からなる、合計20項目からなるストレス尺度を作成した。

## 2. ワーディングの修正

## 2.1 目的

不適切なワーディング（読めない漢字、意味の分からない語句）などの問題点を指摘してもらい、修正を行うことを目的とした。

## 2.2 方法と結果

項目修正は、小・中学生5人（男子2名、女子3名；12～15歳、平均年齢13.4歳）を対象に行い、「親サポート尺度」、「ストレス尺度」において不適切なワーディングの修正を行った。

## 調査 I

## 1. 目的

因子分析を行うことによって、尺度の因子構造を明らかにし、項目を選定することを目的とした。

## 2. 方法

## 2.1 調査対象者

調査 I の対象者は、中学校の1、2年生203名であった。このうち、両親が揃っていないものや、欠損値が含まれていたものを除外し、最終的に、1年生83名（男子46名、女子37名）、2年生79名（男子35名、女子44名）の合計162人（男子83名、女子79名）を分析対象とした（12～14歳、平均年齢12.7歳）。有効回答率は81.3%であった。

## 2.2 手続き

調査 I は、クラスごとに担任教師が質問項目を読み上げ、全員が同時に記入する方式で行われた。

## 2.3 質問紙

## 2.3.1 親サポート尺度

ワーディングの修正を行った36項目からなる親サポート尺度に対して、父親・母親が自分にしてもらえるだろうと思う援助の程度を、「絶対ちがう（1点）」、「たぶんちがう（2点）」、「たぶんそうだ（3点）」、「きっとそうだ（4点）」の4件法で記入するよう求めた。つまり、得点が高いほどサポートの期待が高いことを表す。また、評定は父親、母親を別々に記入してもらった。なお、本研究では岡安ら<sup>14)</sup>や嶋田<sup>15)</sup>の指摘に従い、知覚されたサポートの次元からサポートを測定した。

## 2.3.2 ストレス尺度

ワーディングの修正を行った、20項目からなるストレス尺度を用いた。岡安・嶋田・坂野<sup>51)</sup>はストレス評価の測定で、経験頻度と嫌悪性をかけ合わせる方法が最も妥当であるとしており、本研究もこれにならった。つまり、調査対象者には「次のできごとは、最近数ヶ月の間にどのくらい経験しましたか。また、そのことはどのくらいいやなことでしょうか。」と教示を行い、経験頻度は「全然なかった（0点）」、「たまにあった（1点）」、「ときどきあった（2点）」、「よくあった（3点）」の4件法で、嫌悪性は「全然いやでなかった（0点）」、「少しいやであった（1点）」、「かなりいやであった（2点）」、「非常にいやであった（3点）」の4件法で記入するよう求めた。ストレス得点は経験頻度得点と嫌悪性得点の素点の積とし（各項目の得点範囲は0～9点）、得点が高いほどストレスを感じている程度が高くなるように得点化した。このような方法を用いることで、ストレスに対する認知的評価を含めて測定することが可

能になる。なお、経験頻度を「全然なかった(0点)」と回答した項目については、その嫌悪性の記入を求めなかった。経験頻度が0点、または嫌悪性が0点と評定された項目については、その出来事の衝撃性は0であるとみなし、その項目得点を0点とした。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 親サポート尺度の項目選定と因子構造の検討

親サポート尺度の因子構造の検討及び、項目の選定のために探索的に因子分析を行った。項目得点は、父親と母親のサポートの合計点(両親サポート得点)を用いた。因子分析に先立ち、回答に極端な偏りのある1項目を削除した。次に、残りの35項目について、主因子法、Promax回転による因子分析を行った。Promax回転を行ったのは、因子間に相関が予想されたためと、より単純構造に近づけるためである。その結果、固有値が1.0以上、解釈可能性を基準に3因子を抽出した。そして、因子負荷量が.35以上で、かつ他の因子に.35以上の負荷がない項目について、各因子上位6項目を採択し、最終的に18項目を選出した。各因子上位6項目に限ったのは、項目の精選により使用が簡便になり、他の尺度との併用も容易になると考えたからである。

#### 3.2 ストレッサ - 尺度の項目選定と因子構造の検討

ストレッサ - 尺度の因子構造の検討及び、項目の選定のために探索的に因子分析を行った。因子分析に先立ち、回答に極端な偏りのある1項目(80%以上がストレッサ - 得点を0点と評定した項目)を削除した。次に、残りの19項目について、主因子法、Promax回転による因子分析を行った。その結果、固有値が1.0以上、解釈可能性を基準に4因子を抽出した。そして、因子負荷量が.35以上で、かつ他の因子に.35以上の負荷がない項目を採択し、最終的に15項目が選出された。

## 調 査 II

### 1. 目的

因子分析を行うことによって、尺度の因子構造を明らかにし、項目を選定し、同時に、Cronbachの $\alpha$ 係数(以下 $\alpha$ 係数と略記)を指標に、信頼性の検討を行うことを目的とした。また、両親サポートやストレスの量的な特徴について明らかにすることも目的とした。

### 2. 方法

#### 2.1 調査対象者

調査IIの対象者は、中学校の1,2年生352名であった。このうち、両親が揃っていないものや、欠損値が含まれていたものを除外し、最終的に、1年生147名(男子63名,女子84名),2年生139名(男子61名,女子78名)の合計286人(男子124名,女子

162名)を分析対象とした(12~14歳,平均年齢12.7歳)。有効回答率は81.5%であった。

### 2.2 手続き

調査IIは、クラスごとに担任教師が質問項目を読み上げ、全員が同時に記入する方式で行われた。

### 2.3 質問紙

調査Iで作成した「親サポート尺度(18項目)」、「ストレッサ - 尺度(15項目)」を使用した。

### 3. 結果

#### 3.1 親サポート尺度の項目選定と因子構造・信頼性の検討

親サポート尺度の因子構造の検討及び、項目の選定のために因子分析を行った。項目得点は、父親と母親のサポートの合計点(両親サポート得点)を用いた。回答に極端な偏りのある項目はなかったため、18項目について、主因子法、Promax回転による因子分析を行った。その結果、固有値1.0以上の因子が3因子出現し、それらが解釈可能であったために3因子を抽出した。そして、因子負荷量が.35以上で、かつ他の因子に.35以上の負荷がない項目、合計17項目を採択した。最終的に選出された17項目について、再度因子分析を行い、その結果を表3に示した。

第1因子に高く負荷した項目は、「あなたを大切にしてくれていると思う(.91)」などであり、肯定的な情緒的サポートに関する項目から構成されていた。よってこの因子を「情緒的サポート」と命名した。第2因子に高く負荷した項目は、「あなたの生活態度についてあれこれ言わないと思う(.74)」などであり、子どもに干渉せずに受容的に関わる項目から構成されていた。よってこの因子を「受容的サポート」と命名した。第3因子に高く負荷した項目は、「あなたに欲しい物があるときに買ってくれると思う(.60)」などであり、物質的・金銭的なサポートと行動的なサポートに関する項目から構成されていた。よってこの因子を「手段的サポート」と命名した。今回の分析結果は、調査Iと多少異なるが、本調査のほうが対象者の人数が多いので、今回の結果をもとに以下の分析を行っていく。因子間相関は、.45~.54であり、ある程度の独立性を保っていることが示された。

親サポート尺度の信頼性を検討するために、尺度全体の $\alpha$ 係数と、因子ごとの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、それぞれの $\alpha$ 係数は、尺度全体が.91、「情緒的サポート」が.93、「受容的サポート」が.71、「手段的サポート」が.72であった。いずれも高い水準にあり、高い信頼性が確認された。

以下の分析では、合計17項目の合計得点をその人のサポート得点(父親サポート,母親サポート)とし、両親サポート得点の場合は、父親サポート得点と母親

表3 親サポート尺度の因子分析(主因子法・プロマックス回転後)の結果と  $\alpha$  係数

項目内容	F1	F2	F3	共通性
《第1因子 情緒的サポート》 ( $\alpha = .93$ )				
18 あなたを大切にしてくれていると思う。	.91	-.02	-.04	.78
7 あなたのことを愛してくれていると思う。	.88	.01	-.04	.75
6 あなたのことを見守っていてくれると思う。	.87	.01	-.05	.72
13 あなたのことを心配してくれていると思う。	.81	-.02	.03	.67
4 あなたのことを信じてくれていると思う。	.70	.05	.06	.57
5 あなたが落ち込んでいるとき元気づけてくれると思う。	.66	.00	.09	.50
10 あなたのいいところも悪いところも認めてくれていると思う。	.64	.14	.01	.51
11 あなたがよい成績をとったり試合で勝ったりした時に心からおめでとうと言ってくれる。	.58	.00	.15	.44
15 あなたの将来について話し合ってくれると思う。	.50	.14	.14	.44
《第2因子 受容的サポート》 ( $\alpha = .71$ )				
12 あなたの生活態度についてあれこれ言わないと思う。	.01	.74	-.09	.49
17 あなたが失敗をしてもゆるしてくれると思う。	.16	.61	.07	.56
3 あなたの好きなようにさせてくれると思う。	.04	.54	.04	.36
《第3因子 手段的サポート》 ( $\alpha = .72$ )				
1 あなたに欲しい物があるときに買ってくれると思う。	-.15	.26	.60	.49
14 あなたがどうしてもお金が必要なときに出してくれると思う。	.08	.11	.55	.44
2 あなたといっしょに遊びに出かけたりすると思う。	.31	-.19	.54	.42
8 あなたの誕生日などの記念日にプレゼントをくれると思う。	.13	-.05	.41	.21
16 あなたの食べたいものを食べさせてくれると思う。	.05	.29	.36	.36
累積寄与率(%)	43.1	53.6	60.2	
因子間相関	F 1	F 2		
	F 2	.45		
	F 3	.49	.54	

サポート得点を加算したものとした。また、各因子に負荷の高かった項目の平均得点を因子得点とした。

### 3.2 ストレッサー尺度の項目選定と因子構造・信頼性の検討

ストレッサー尺度の因子構造の検討及び、項目の選定のために因子分析を行った。回答に極端な偏りのある項目はなかったので、15項目について、主因子法、Promax回転による因子分析を行った。その結果、固有値1.0以上の因子が4因子出現し、それらが解釈可能であったために4因子を抽出した。そして、因子負荷量が.35以上で、かつ他の因子に.35以上の負荷がない項目を採択した。最終的に選出された13項目について、再度因子分析を行い、その結果を表4に示した。

第1因子に高く負荷した項目は、「友達に無視された(.85)」などであり、友達との関係に関する項目から構成されていた。よってこの因子を「友達関係ストレッサー」と命名した。第2因子に高く負荷した項目は、「親が自分のことを理解せずに、あれこれ口出ししてきた(.90)」などであり、親子関係に関する項目から構成されていた。よってこの因子を「親子関係ストレッサー」と命名した。第3因子に高く負荷した項目は、「自分の性格について悩んだ(.79)」

などであり、自分の事柄に関する項目から構成されていた。よってこの因子を「自己ストレッサー」と命名した。第4因子に高く負荷した項目は、「勉強をしたくないと思った(.60)」などであり、勉強に関する項目から構成されていた。よってこの因子を「勉強ストレッサー」と命名した。今回の分析結果は、調査Iと多少異なるが、本調査のほうが調査対象者の人数が多いので、今回の結果をもとに以下の分析を行っていく。因子間相関は、.15~.49であり、ある程度の独立性を保っていることが示された。

ストレッサー尺度の信頼性を検討するために、尺度全体の $\alpha$ 係数と、因子ごとの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、それぞれの $\alpha$ 係数は、尺度全体が.82、「友達関係ストレッサー」が.80、「親子関係ストレッサー」が.81、「自己ストレッサー」が.72、「勉強ストレッサー」が.63であった。一部低い値であったが、概ね高い水準にあり、高い信頼性が確認された。

以下の分析では、合計13項目の合計得点をその人のストレッサー得点とし、各因子に負荷の高かった項目の平均得点を因子得点とした。

### 3.3 各得点における学年差・性差の検討

サポート得点(両親・父親・母親)、ストレッサー得

表4 ストレッサー尺度の因子分析(主因子法・プロマックス回転後)の結果とα係数

項目内容	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
《第1因子 友達関係ストレス》 (α=.80)					
9 友達に無視された.	.85	-.05	-.11	.06	.64
11 同性の友達との仲がうまくいかなかった.	.65	-.03	.28	-.09	.64
10 友達とケンカをした.	.63	-.05	.05	.06	.43
8 友達にからかわれたり, 悪口を言われた.	.62	.19	-.04	.01	.47
《第2因子 親子関係ストレス》 (α=.81)					
6 親が自分のことを理解せずに, あれこれ口出ししてきた.	.01	.90	-.03	-.00	.80
7 親が自分の気持ちを分かってくれなかった.	.08	.76	.07	-.05	.62
5 親に自分の生活態度について注意されたり, しまられたりした.	-.10	.60	-.00	.17	.46
《第3因子 自己ストレス》 (α=.72)					
13 自分の性格について悩んだ.	.01	.08	.79	-.13	.65
12 自分の将来について悩んだ.	-.07	-.03	.60	.14	.36
14 自分の能力について悩んだ.	.10	-.04	.60	.14	.46
《第4因子 勉強ストレス》 (α=.63)					
3 勉強をしたくないと思った.	-.04	.04	.18	.60	.44
4 親に「勉強しなさい」と言われた.	.03	.32	-.09	.48	.48
2 テストがあった.	.11	-.00	-.01	.47	.25
累積寄与率(%)	32.0	48.2	58.3	66.3	
因子間相関	F 1	F 2	F 3		
	F 2	.31			
	F 3	.48	.25		
	F 4	.18	.49	.15	

表5 各得点の学年別・性別平均得点(標準偏差)と分散分析結果

	1年生		2年生		学年差 F値	性差 F値	交互作用 F値
	男子(N=63)	女子(N=84)	男子(N=61)	女子(N=78)			
両親サポート 【34~136】	98.8(18.4)	105.1(14.2)	91.2(16.6)	105.8(15.7)	2.25	29.61 ***	4.61 *
父親サポート 【17~68】	49.0(9.4)	51.6(8.6)	45.3(9.1)	52.3(8.6)	1.98	20.34 ***	4.47 *
母親サポート 【17~68】	49.7(9.3)	53.5(8.3)	46.0(8.6)	53.5(7.7)	3.59	31.75 ***	3.51
ストレス 【0~117】	22.3(22.3)	23.7(18.1)	26.5(19.0)	25.9(19.9)	1.84	0.03	0.18

注) 【 】内は得点範囲

\* p<.05 \*\*\* p<.001

点の学年差と性差を明らかにするため, 学年×性の2要因分散分析を行った。その結果得られた, 各得点の学年別・性別平均得点とその標準偏差, 及び分散分析の結果を表5に示した。両親サポート得点, 父親サポート得点においては, 性差の主効果が認められ(それぞれ  $F(1,282)=29.61, p<.001$ ;  $F(1,282)=20.34, p<.001$ ), 女子が男子より高得点であった。また, 交互作用も認められ(それぞれ  $F(1,282)=4.61, p<.05$ ;  $F(1,282)=4.47, p<.05$ ), 女子については学年差はないが, 男子については1年が2年より高得点であった。母親サポート得点においては, 性差の主効果が認められ( $F(1,282)=31.75,$

$p<.001$ ), 女子が男子より高得点であった。その他については有意な主効果 交互作用は認められなかった。

### 3.4 両親サポート(父親サポート・母親サポート)の量的特徴

#### 3.4.1 サポート源の特徴

父親サポート得点と母親サポート得点の差を明らかにするために, t検定を行った。表6に父親サポートと母親サポートの平均得点とその標準偏差, 及びt検定結果を示した。全体と女子において, 有意差が認められ(それぞれ  $t(285)=-3.21, p<.01$ ;  $t(285)=-2.80, p<.01$ ), 母親サポートが父親サポートより高得点であった。

表6 父親・母親サポート平均得点(標準偏差)とt検定結果

	父親サポート	母親サポート	t値
全体	49.7 (9.2)	51.1 (8.9)	-3.21**
男子	47.2 (9.4)	47.9 (9.1)	-1.58
女子	51.9 (8.6)	53.5 (8.0)	-2.80**

\*\* p < .01

### 3.4.2 因子得点の特徴

両親サポートにおける各因子の得点差を明らかにするために、1要因3水準の分散分析を行った。その結果得られた、各因子の平均得点とその標準偏差、及び分散分析の結果を表7に示した。分散分析の結果、主効果が認められたので( $F(2,855)=102.46$ ,  $p<.001$ ), LSD法による多重比較を行った。その結果、情緒的サポート、手段的サポート、受容的サポートの順に高得点であった( $p<.001$ )。

表7 両親サポートにおける各因子の平均得点(標準偏差)と分散分析結果

因子	平均得点(標準偏差)	F値
情緒的サポート	6.39(1.19)	102.46***
手段的サポート	5.73(1.10)	情緒的>手段的>受容的
受容的サポート	4.94(1.33)	

\*\*\* p < .001

### 3.5 ストレッサーの量的特徴(因子得点の特徴)

ストレッサーにおける各因子の得点差を明らかにするために、1要因4水準の分散分析を行った。その結果得られた、各因子の平均得点とその標準偏差、及び分散分析の結果を表8に示した。分散分析の結果、主効果が認められたので( $F(3,1140)=36.92$ ,  $p<.001$ ), LSD法による多重比較を行った。その結果、勉強ストレッサーが友達関係ストレッサーや自己ストレッサーより有意に高得点であり( $p<.001$ )、親子関係ストレッサーが友達関係ストレッサーや自己ストレッサーより有意に高得点であり( $p<.001$ )、勉強ストレッサーが親子関係ストレッサーより有意に高得点であった( $p<.05$ )。

表8 ストレッサーにおける各因子の平均得点(標準偏差)と分散分析結果

因子	平均得点(標準偏差)	F値
友達関係ストレッサー	1.27(1.19)	36.92***
親子関係ストレッサー	2.40(2.61)	勉強>友達関係,自己***
自己ストレッサー	1.30(1.99)	親子関係>友達関係,自己***
勉強ストレッサー	2.82(2.21)	勉強>親子関係*

\* p < .05 \*\*\* p < .001

## 4. 考察

### 4.1 親サポート尺度, ストレッサー尺度の因子構造について

因子分析の結果、親サポート尺度で抽出された因子は、情緒的サポート、手段的サポート、受容的サポートの3因子であった。先行研究の中学生を対象にした親

からのサポートを測定する尺度で、2因子以上抽出されたものは、廣岡ら<sup>22)</sup>、蒲田ら<sup>24)</sup>、渡辺ら<sup>25)</sup>の尺度であり、本研究の尺度はこれらと同じ多因子構造であった。情緒的サポートと手段的サポート(道具的サポートとも呼ばれる)の2つは一般的なサポートカテゴリーである<sup>26,29,30,52)</sup>。本尺度ではこの2つに加えて、受容的サポートが抽出されたが、このサポートは言わば、干渉せずに受け入れることによるサポートである。このような性格を持つサポートであるために、前者2つとは区別されたのであろう。また、他の尺度にはこの因子に相当するものはなく、この受容的サポートが抽出されたことは、中学生という発達段階における親子関係の特徴が因子構造に反映されたという点で、意義深い結果が得られたと言える。ところで、ソーシャルサポートのカテゴリーについて、理論的分類と統計的分類が一致しない問題が挙げられることがある<sup>16,17)</sup>。科学性と実践性のどちらを優先するかは研究者の立場にもよるが、筆者は、細やかな違いを調べたい場合には理論的な分類に基づいてもよいのではないかという考え<sup>16)</sup>と同じ立場である。つまり、因子間に非常に強い相関がない限り、理論的分類や解釈可能性に従って分類した方が、より実際の情報が得られると考える。親や臨床家にとっては、具体的にどんなサポート行えば良いのかということについて知りたいはずである。

ストレッサー尺度については、因子分析の結果、最初のカテゴリ通りに友達関係ストレッサー、親子関係ストレッサー、自己ストレッサー、勉強ストレッサーの4因子が抽出された。本尺度は、項目数が13項目と比較的少なく簡便であり、かつ、自己と親子関係を含めた生活ストレッサーに焦点を当てているために、より包括的な測定が可能な尺度であると思われる。中学生において、この4つのカテゴリーの多くはストレス反応などの身体的・精神的健康との関連が多くの研究から示唆されている<sup>42,46,50)</sup>。重要なストレッサーである。

### 4.2 両親サポート・ストレッサーの量的特徴

サポート得点(両親・父親・母親)において、女子が男子より高得点であったという知見は先行研究<sup>14,20,22,31)</sup>と概ね一致するものである。この性差は、女子は男子より親への依存傾向が高いこと<sup>53)</sup>や、女子はサポートを受けていると認知しやすいからではないかと考える。また、男子については交互作用が認められ、1年が2年より高得点であったのは、1年生は小学生の依存性をそのまま引きずりサポートに頼る傾向が強いが、2年生になると依存傾向が弱まるためではないかと推察される。

母親サポートが父親サポートより高得点であったことは、西野・色川<sup>20)</sup>、岡安ら<sup>14)</sup>、嶋田<sup>31)</sup>と一致する。

この結果は、父親は母親と比べて一緒にいる時間も少ない<sup>54)</sup>という父子間の距離のためであると考えられる。しかし、中学生の精神的健康は父親の家庭関与度が高いほど良好になること<sup>55)</sup>や、家族システムを考えると、得点の低さだけで父親サポートの重要性の効果を軽視することはできない。例えば子どもに十分なサポートができないとしても、代わりに母親に対してサポートすることで、母親が子どもに良いサポートをするという、父親 母親 子ども、という間接的な効果があると思われる。また、サポート量について母親が父親より多いという結果は、男子より女子において特徴的であった。これより、母娘関係が親密で、父娘関係が疎遠という傾向が示唆される。

情緒的サポート因子の平均得点が一番高いという結果は、つまり現代の中学生は、親の役割として最も基本的なサポートを実際にしてくれるだろうと思っているということである。勉強ストレス因子の平均得点が一番高いという結果は、岡安ら<sup>42)</sup>、岡安ら<sup>51)</sup>と一致する。この結果より、神藤<sup>50)</sup>も指摘しているよ

うに、教育現場では特に重要となる学業ストレスに焦点を絞った研究が必要であることが伺える。また、親子関係ストレスも2番目に高く評価されており、親はサポート源にもなるが、同時にストレスとしても高く評価されているという結果が得られた。

#### 4.3 終わりに

亀口<sup>56)</sup>は予防研究における心理学の役割について主張しているが、国レベルの介入に加え、中学生の時期における、予防研究を意識した心理学的研究の発展がこれからは強く望まれるのではなからうか。本研究で作成された、親サポート尺度やストレス尺度を説明変数とし、精神的健康を基準変数とした重回帰分析を行うなどの方法を用いることによって、実際に親や臨床家が求める、現実の援助行動に結びつくような知見を提供することが可能になると考えられる。このような、治療的介入ではない、コミュニティ心理学的な問題行動の予防と精神的健康の増進という視点がこれからますます重要視されてくるであろう。

#### 文 献

- 1) 文部科学省：文部科学省白書。財務省印刷局，東京，2003。
- 2) 厚生労働省：厚生労働白書。ぎょうせい，東京，2001。
- 3) 桑島昭文：健やか親子21と思春期保健対策。思春期学，20，311-316，2002。
- 4) 藤野京子：非行少年のストレスについて。教育心理学研究，44，278-286，1996。
- 5) 古市裕一：登校拒否の発生要因を再検討する—ストレス理論からのアプローチ—。児童心理，47，741-746，1993。
- 6) 皿田洋子：中学生のストレス。教育と医学，40，1016-1022，1992。
- 7) 佐藤淑子：男の子の親子関係・女の子の親子関係。児童心理12月号臨時増刊，55(18)，34-40，2001。
- 8) 滝沢三千代：思春期・青年期の発達心理。伊藤隆二，橋口英俊，春日喬編著，思春期・青年期の臨床心理学，初版，駿河台出版社，東京，1-38，1994。
- 9) 稲村博：思春期臨床事例の問題発生要因からみた父親の役割・母親の役割に関する研究。社会心理学研究，8，145-158，1993。
- 10) 巽葉子：子どもの成長を信頼し見守れる親。児童心理，56，1219-1224，2002。
- 11) 久田満：ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題。看護研究，20，170-179，1987。
- 12) 周玉慧，深田博己：在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究。社会心理学研究，17，150-184，2002。
- 13) Barrera M: Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 17, 413-445, 1986。
- 14) 岡安孝弘，嶋田洋徳，坂野雄二：中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果。教育心理学研究，41，302-312，1993。
- 15) 嶋田洋徳：児童の心理的ストレスとそのコーピング過程—知覚されたソーシャルサポートとストレス反応の関連—。ヒューマンサイエンスリサーチ，2，27-44，1993。
- 16) 川原誠司：子どもを対象としたソーシャルサポート研究の動向。東京大学教育学部紀要，2，245-253，1994。
- 17) 宮崎隆穂，小玉正博：わが国のソーシャルサポート研究とその課題—カウンセリングにおける活用をめざして—。カウンセリング研究，33，95-102，2000。
- 18) 三浦正江，嶋田洋徳，坂野雄二：中学生におけるソーシャルサポートがコーピングの実行に及ぼす影響。ストレス科学研究，10，13-24，1995。

- 19) 森和代, 堀野緑: 児童のソーシャルサポートに関する一研究. 教育心理学研究, 14, 402-410, 1992.
- 20) 西野美佐子, 色川亜希: 中学生の登校規定要因とソーシャルサポートに関する研究. 東北福祉大学研究紀要, 23, 87-100, 1998.
- 21) 嶋田洋徳, 岡安孝弘, 坂野雄二: 小学生用ソーシャルサポート尺度短縮版作成の試み. ストレス科学研究, 8, 1-12, 1993.
- 22) 廣岡秀一, 森田千恵子: 中学生のストレスとソーシャルサポートに関する研究—ソーシャルサポートの緩衝効果を中心に—. 三重大学教育学部研究紀要, 53, 167-178, 2002.
- 23) 嶋信宏: 高校生のソーシャル・サポート・ネットワークの測定に関する一研究. 健康心理学研究, 7, 14-25, 1994.
- 24) 浦田いずみ, 渡辺弥生: 中学生の不登校児のソーシャルサポートに関する研究 I. 日本教育心理学第36回大会発表論文集, 501, 1994.
- 25) 渡辺弥生, 浦田いずみ: 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル—登校児と不登校児の比較—. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 49, 337-351, 1999.
- 26) 福岡欣治: ソーシャルサポート内容及びサポート源の分類について. 日本心理学会第64回大会発表論文集, 144, 2000.
- 27) Barrera M and Ainlay SL: The structure of social support: A conceptual and empirical analysis. *Journal of Community Psychology*, 11, 133-143, 1983.
- 28) Cohen S and Wills TA: Social support, stress and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357, 1985.
- 29) Lin N: conceptualizing social support. In Lin N, Dean A, and Ensel W(Eds), *Social Support, Life events, and Depression*, Academic Press, Orland, 17-30, 1986.
- 30) Vaux A: *Social Support: theory, reseach, and intervention*. Praeger, New York, 1988.
- 31) 嶋田洋徳: 知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達変化に関する基礎的研究. 広島大学総合科学部紀要 IV 理系編, 22, 115-128, 1996.
- 32) 村瀬嘉代子: 不登校と家族病理. 児童青年精神医学とその近接領域, 29, 374-389, 1988.
- 33) 山崎道子: 登校拒否と家族. 加藤正明, 藤縄昭, 小此木啓吾編, 講座家族精神医学3ライフサイクルと家族病理, 初版, 弘文堂, 東京, 211-231, 1982.
- 34) 児童生徒課: 平成13年度生徒指導上の諸問題の現状について(速報). 教育委員会月報10月号, 54, 45-57, 2002.
- 35) Holmes TH and Rahe RH: The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Reserach*, 11, 213-218, 1967.
- 36) 朝倉隆司, 有光由紀子: 大都市部における小学生の生活上のストレスと健康に関する研究. 学校保健研究, 35, 437-449, 1993.
- 37) 三川俊樹: 青年期における生活ストレスと対処行動に関する研究. カウンセリング研究, 21, 1-13, 1988.
- 38) 古市裕一, 國房京子: 小学生の学校ざらい感情と教師の指導態度—ストレス理論からの検討—. 岡山大学教育学部研究集録, 107, 159-167, 1998.
- 39) 菅 徹, 上地安昭: 高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察. カウンセリング研究, 29, 197-207, 1996.
- 40) 森下正康, 津村孝幸: 「学校ストレス」と「いじめ」が子どもの抑鬱性, 攻撃性, 登校拒否感情におよぼす影響. 和歌山大学教育学部教育実践指導センター紀要, 8, 11-24, 1998.
- 41) 長根光男: 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして—. 教育心理学研究, 39, 182-185, 1991.
- 42) 岡安孝弘, 嶋田洋徳, 丹羽洋子, 森俊夫, 矢富直美: 中学生の学校ストレスとストレス反応との関係. 心理学研究, 63, 310-318, 1992.
- 43) 嶋田洋徳, 岡安孝弘, 坂野雄二: 児童の心理的ストレスと学習意欲との関連. 健康心理学研究, 5, 7-19, 1992.
- 44) 嶋田洋徳, 鈴木敏城, 神村栄一, 國分康孝, 坂野雄二: 高校生の学校ストレスとストレス反応との関連. 日本カウンセリング学会第28回大会発表論文集, 142-143, 1995.
- 45) 堂野佐俊, 田頭穂積, 土江禎子: 児童期の心理的ストレスに関する一研究. 広島文教女子大学紀要, 25, 165-179, 1990.
- 46) 菊島勝也: ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響. 性格心理学研究, 7, 66-76, 1999.
- 47) 中村伸枝, 兼松百合子: 10代の子どものストレスと対処行動. 小児保健研究, 55, 442-449, 1996.
- 48) 高倉実, 城間亮, 秋坂真央, 新屋信雄, 崎原盛造: 思春期日常生活ストレス尺度の試作. 学校保健研究, 40, 29-40,

- 1998 .
- 49) 落合良行, 佐藤有耕: 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44, 11-22, 1996 .
- 50) 神藤貴昭: 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応及び自己成長感・学習意欲に与える影響. 教育心理学研究, 46, 442-451, 1998 .
- 51) 岡安孝弘, 嶋田洋徳, 坂野雄二: 中学生の学校ストレスの測定法に関する一研究. ストレス科学研究, 8, 13-23, 1993 .
- 52) 浦信宏: セレクション社会心理学 8 支え合う人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—. 初版, サイエンス社, 東京, 1992 .
- 53) 加藤隆勝, 高木秀明: 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係. 教育心理学研究, 28, 336-340, 1980 .
- 54) 総務庁青少年対策本部: 子供と家族に関する国際比較調査報告書. 大蔵省印刷局, 東京, 1996 .
- 55) 平山聡子: 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連. 発達心理学研究, 12, 99-109, 2001 .
- 56) 亀口憲治: 家族心理学研究における臨床的接近法の展開. 心理学研究, 69, 53-65, 1998 .

(平成15年11月29日受理)

## A Study of Parental Support and Stressors in Junior High School Students (Ⅰ) —Development of The Parental Support Scale and The Stressor Scale—

Takashi HATTORI and Osamu SHIMADA

(Accepted Nov. 29, 2003)

Key words : PARENTAL SUPPORT, STRESSOR, JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENT

### Abstract

The purpose of this study is to develop parental support scale and stressor scale for junior high school students, and to investigate the characteristics of parental support and stressors quantitatively.

The questionnaire items were collected from mothers' descriptions on parental support and stressors, and also from preceding studies. After several items were modified, 162 junior high school students answered the scales in StudyI. Then items were selected again for StudyII. In StudyII, the data of 286 students were analyzed. The results are as follows : 1) the parental support scale has a three-factor structure (emotional, instrumental, and accepting support), 2) the stressor scale has a four-factor structure (stressors concerning peers, parents, his/her own self, and school subject).

The major findings as they relate to quantitative characteristics are : 1) girls have significantly higher scores than boys on parental support, 2) a mother's support is expected to be significantly higher than a father's support, 3) emotional support has the highest score in the parental support scale, and the score for school subject is the highest in the stressor scale.

Finally, future directions as a result of this study are discussed.

Correspondence to : Takashi HATTORI      Master's Program in Clinical Psychology, Graduate School of  
Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.13, No.2, 2003 271-281)